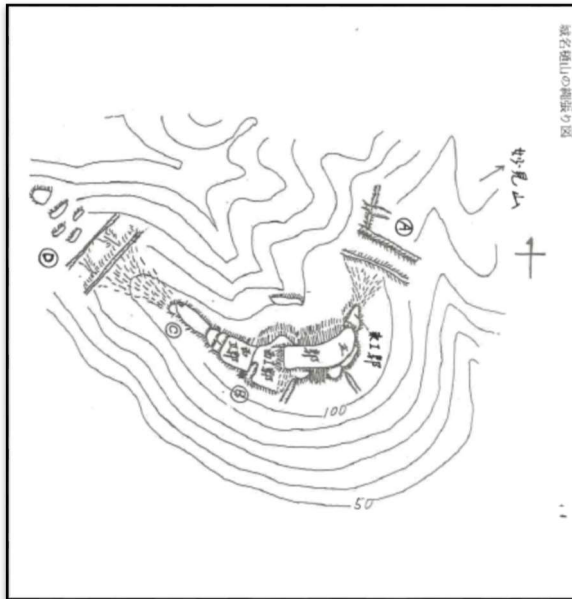




## ○きなひ山

三刀屋高校の出入口から三刀屋城址公園を臨む⇒

夕方家路につくため学校の坂を下ると、三刀屋城址公園の看板が見えてきます。さらに国道54号線を宍道方面へ走ると、雲南市役所の裏山の頂上付近に「きなひ山」の文字が見えてきます。『出雲風土記』に地名が出てくる城名樋山(きなひ山)は、戦国期の山城の跡で今は公園になっています。



かれこれ20年以上も前になりますが、島根県内の中近世城郭分布調査に関わる研修会で、きなひ山を訪れたことがありました。その時描いた縄張り図(城郭遺構図)が左の図です。なにぶんほぼ素人であったので正確性には欠けますが、素人でも遺構がわかりやすく描きやすかったのを覚えています。他の調査員の方が出雲部では一級の城郭遺構であると言われたこともうなずけました。図でA~Dとしている地点が堀や堀切を確認できる場所です。堀と言っても松江城のような水堀ではありません。大きな凹みのようなものです。『木次町誌』を見ると、城跡には馬乗馬場や井戸などの跡があるとしています。

研修ではありましたが、当時の木次町教育委員会から、①城名樋山が風土記に見える城名樋山と同じかどうか知りたい。②城郭遺構の範囲を明確にすることと合わせ、遊歩道をつける際の配慮点を知りたい。の2点の要望がありました。斐伊小学校の全面改築にあわせて城名樋山を史跡公園として整備する計画があつたことだったと記憶しています。ちなみに、『出雲風土記』には、その昔、大穴持命が八十神を征伐するために城名樋山に城を築いたと出てきます。

城名樋山城は、戦国期の佐世氏の支城であったと推測されます。山陰の戦国大名の尼子氏に与していた佐世氏は、山口の戦国大名であった大内氏が1542年出雲に侵攻した際、尼子方として戦いました。対岸の尼子十旗(尼子氏にとって重要な10の城)に数えられる三刀屋城の城主であった三刀屋氏は、途中で大内方となっています(その後再び尼子方へ)。ちなみに、出雲侵攻は失敗し大内氏は敗走しました。その20年後、毛利氏が出雲に侵攻した際には、佐世氏も三刀屋氏も毛利方として戦い、尼子氏は滅亡しました。

城名樋山の地理的位置を考えると、国道54号線が斐伊川と交錯する地点でもあり、三刀屋川もここで合流するなど、交通の要衝に位置しています。木次商人が斐伊川水運などを利用して活躍していたことも考え合わせると、ここは流通の要衝であったと推察されます。そのことと雲南市役所の立地も関係するかもれません。

中学校説明会で、「三刀屋木次ICが木次三刀屋ICでないのはなぜ？」という話をしています。学びは、疑問を抱く感性と、それを深める探究力が大事で、その往還が学びの推進力となり、主体性も養われるという話をするためです。そうした疑問をもつことを、身近なところからはじめるのが地域学習、より深化させていくのが地域課題解決学習と思っています。先日、本校1年生の「未来創造」で、「なぜ焼き鯖が雲南名物になったか」を扱っていました。こうした学習を通して、探究力をつけ、生徒の感性が豊かになることを期待しています。